

「屋根の上のサワン」——教材化の一試案——

ひとりひとりの読みを大切にすゝる授業を目指して

岡 田 京 子

一、はじめに

黒板の文字を写すことが勉強だと思っている生徒が大勢いる。彼らの頭には、答えは先生から与えられるものだという観念がこびりついている。自分で考え、答えを見つけていくのは苦手なのである。小説などの文学作品を読んでも、この作品の主題はエゴイズムだとか無常観だとか、一つの模範回答的な答えを与えられるとそれで満足してしまい、作品の中に入り込むことができない。今回の実践は、生徒一人一人の読み取ったものを大切に、自分なりの作品理解ができるようにと始めて始めたものである。

〈教材〉井伏鱒二「屋根の上のサワン」

〈対象学年〉高校一年生 三クラス

(尚学図書 国語I新訂版)

(四十七人学級)

〈指導過程〉(五時間扱い)

- ① 全文を通読し、話の概略をつかませる。
- ② 全体を五つの場面に分け、場面ごとに主人公「私」の気持ちを読みとらせる。
- ③ 全体を通じての「私」の心情、態度をまとめさせ、自分自身と関わらせて作文を書かせる。

二、指導目標とその具体的展開

指導目標は三点あげた。以下、その目標と、具体的にどのような展開したかを示す。

- (1) 主人公「私」の気持ちを自分なりの言葉でまとめさせ、「私」像をつくりあげていく。

授業は作業プリントを中心に進めた。

場面ごとに、情景、「私」やサワンの様子を本文から抜き出させ、

また、そこから読みとれる「私」の心情を自分のことばで表わして書きこませる。「私」の心情については、できるだけ多くの生徒に

発表させるようにした。

作業プリントと生徒記入例（ ）…本文より抜き出す

（抄） へ ｛ …自分のことばでまとめる

第一場面	情景描写	「私」の行動と心	サワンの描写
<p>早春 （水草の密生した湿地）</p> <p>治療 「私」の部屋 （雨戸を閉めきる 五燭の電灯 暗い 陰うつ）</p>		<p>思い屈した心 （言葉に言い現せないほど屈託した気持ち）</p> <p>← 慰めてくれる 「どうしてもこの鳥を丈夫にしてやるう」</p> <p>「私」の親切 手荒なやり方 ・両脚を糸でしばる ・翼を胴体に押しつける ・彼の首をまたの間に挟む ・「じっとしている」としかりつける ・鉛筆削りの小刀</p>	<p>傷ついたがん （羽毛や体の温かみ） 意外に重たい目方</p> <p>（極端に誤解） 人がせっかく親切にしてやっているのに…。</p>

第 五 場 面

翌日

朝の微風
岸に生えている背の高い草
穂状花序の実
綿毛の種子

机の前に座ってみる

〈おちつかない〉

早く彼の鳴き声がやんでくれればいい

〈彼の声を聞いているのはたまらない〉

明日からは彼の羽を切らないことにして出発の自由を与えてやらなくてはなるまい

〈サワンの好きなようにしてやろう〉
決心

〈明日の朝になったらサワンがとべるようにしてやろう〉

ろうばい

「サワン、サワンはいないか。いるならば出て来てくれ、どうか頼む、出て来い」

サワンの鳴き声

〔号泣〕

想像の中に現れたサワン

甲高く鳴き叫ぶ

〈「私」の心の中にも激しい風雨が吹きあれている〉

私の想像するサワン

「サワンよ、月明の空を高く、楽しく飛ばよ」

〈私を忘れないでほしい〉

サワンの姿が見えない

・廊下の下にも屋根の上にも、どこ

にもいない

・一本の胸毛

・沼池にもいないらしい気配

〈サワンがいなるときびしい後悔している〉

。発問と生徒の発表（抄）

。サワンの行動に言葉をさしはさんだり、手招きしたりする「私」の気持ちはどうか。

。サワンに無視された「私」の気持ちはどうか。

。「遠い離れ島に漂流した老人の哲学者が十年ぶりにようやく沖を通りすがった船を見つけた時のありさま」とは、どういふありさまか。

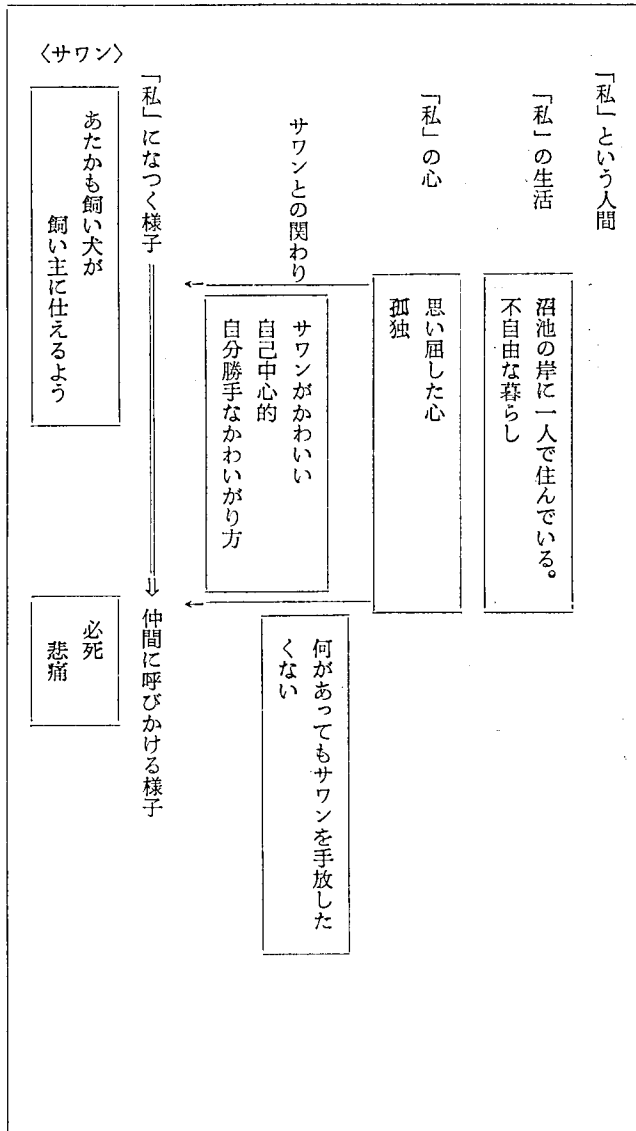
。なぜ、普通の人ではなく、「老人の哲学者」なのか。

もう一度会いたい
哀願

彼の季節向きの旅行に出て行ってしまったのでありましょう
へ悲しいけれど、サワンにとってはよかったです。▽

- ・ サワンに対して不安な気持ち。
- ・ あせった。
- ・ はなれてほしくない。
- ・ あんなサワンを見ているのはたまらない。
- ・ いらいらしている。腹がたつ。
- ・ さびしい。くやしい。
- ・ 何とかしてサワンを屋根の上からおろしたい。
- ・ よろこんで走りまわる。
- ・ 孤独ではなくなる。
- ・ 両手を振る、泳いでいく。
- ・ 待ちに待っていたものにようやく会えた。
- ・ 自由に動けない。
- ・ 自分の状況をふつうの人よりよく考えられる。
- ・ 弱っている。
- ・ いかにも何年もこの島にいるような感じがする。

最後に、「私」像のまとめとして、次のようなプリントを配布し、とするためである。これは、後に示す目標(3)達成のための、クラス全体の共通理解



(2) 表面にあらわれた「私」の行動や心情だけでなく、情景やサワンの描写の中に投影された「私」の姿を読みとらせる。

この作品は、主人公「私」の目を通して見た世界という設定になっている。そのため、情景描写も、サワンの描写も、客観的に描かれたものではなく、「私」の心情が反映されたものである。つまり、

それらを詳しく見ていけば、「私」という人間が、よりはっきりとわかるはずである。

それが典型的にあらわれるのは、第四場面、屋根の上でサワンが仲間と呼びかける声を、私が一人さびしく聞いている場面である。その中に、「かすかながんの遠音」が「夜更けそれ自体が孤独のためにはうち負かされてもらすため息」に聞こえる、という表現が出てくる。

ここで、生徒は、「孤独のため息をつく」という行為はどういうことかわかって、どうして夜更けが孤独なのか、ということとは理解できないでいる。そこで、孤独なのは誰かとたずねると、「サワン」という答えと、「私」という答えとが加えてくる。徐々に、これは「私」の気持ちが投影されているということがわかってきたところで、プリントを見ながら、それまでの場面で同じような表現がないか捜させてみると、今度はサワンが仲間に向かって鳴き叫ぶ様子の描写や、その背後の月が「赤く汚れていびつ」に見えているのも、「私」の心情のせいだとすぐにわかった。

次の、サワンが実際に逃げ出す場面では、プリント中に「私」の気持ちを自分の言葉でまとめる箇所を多くとった。本文の表現から「私」の気持ちを想像させるためである。が、実際には、この場面には「私」の心情を推察していく手がかりとなるものは少なく、生徒には難しかったようで、空欄の目立つ者もいた。

(3) 主人公「私」と自分自身とを関わらせて読ませる。

これは、作品を、言葉の上だけでの理解に終わらせないための試みである。指導過程の最初と最後の二回にわけて、実践を行った。

まず、「私」がサワンを助けた場面で、その時の「私」は、「思ひ屈した心」「言葉に言い表せないほど屈託した気持ち」で歩いていた、という表現が出てくる。「屈託」の辞書の意味を押さえる上で、「暗い、沈みこむような気持ち」など、できるだけわかりやすい表現におきかえ、さらに、自分ならどういう時に「思ひ屈する」か考えてノートに書くよう指示し、数名に発表させた。

○ 何か失敗した時

○ テストの点が悪かった時

○ 次の目テストがあるのにその範囲のところがわかっていない時

○ 睡眠不足で部活に出る時

○ 口げんかしたり、おこられた時

○ 体の調子が悪い時

○ 天気が悪い時

○ 問題に答えられない時

○ くだらない事を聞かれた時

○ などの発表があった。

このあと、プリントを使って場面ごとに「私」の心情をつかませ、一応のまとめができたところで、作文を書かせた。題は「私」と「私」である。言うまでもなく前者の「私」は主人公の「私」であり、後者は読者である自分自身のことである。作文の内容は自由であるが、必ず自分自身と関わらせて書くことと、題は「私の中の「私」とかえてもよいことを指示しておく。

一口に「私」と自分自身とを関わらせて読むといつてもなかなか難しかったようであるが、少数ながらも、「私」の心情が人間誰にも共通する感情である、と気づいたものはいた。以下、生徒の作文例をいくつか示す。

① 「私」の姿は人間全てに共通する姿ととらえているもの

「私」は孤独で屈託した心をもっている。これは今の僕の状態に似ている。そして、みんなが、どこかで、大小はあろうが、共通している所だと思ふ。自分本位なところ、心が弱いところ、自分自身に矛盾を感じている部分など (男)

人間ほど自分勝手な動物はいないと、この文で強く感じた。僕もだが、自分が満足すればいいという考え方がものすごく強い。「私」のように思い届した心を持っている人ほど、そういう心を和らげてくれる対称物に出会った時の充実感は大きいと思う。私の行動も分からない訳ではないが、サワンは助けてくれた礼として帰ってくるだろうか。(男)

一人でいるのは寂しい。だから友達がほしくなる。一人の友達ができる、それまでさびしく孤独だった心が、その友達を独占したくなるような心が変わる。でもその友達を自由をうばうことはよくない。(男)

鳥が「私」になつくと、自分の言う通りにならないといやなのが人間の神理だと思ふ。それがよく表現されているなあと思つた。私もそう思う時は何回かある。それは人類用語で「わがまま」という

言葉にあたいたする。「私」みたいに一人で孤独に暮らしていると、「わがまま」という感情には気がつかないだろう。——中略——例えは悪いが、「刑務所からやっつと社会に出た時の希望」みたいな気持ちでサワンのせわをしていたんだろふと思つた。(女)

どっちみち「私」も私も同じだ。人間で残酷なんだ。でもせめて少しはましな人間になりたい。(女)

② 「私」と私の共通点を見いだしたもの

毎日独りはちちっていつたら分かるような気もします。私も家に独りきりになったときなど、何もしゃべりはいないぬいぐるみでさえ私の話し相手になれるのですから……。そんな中で唯一の話し相手のサワンがいなくなった時の「私」の気持ちを考えると……：思い切るのにずい分の勇氣がいったと思います。この「私」一見気の弱そうに見えるけど根はしっかりしている人ではないかと思ひます。(女)

この「私」は自分の心のよりどころをサワンという名のがんに求めていたのだと思ふ。私も犬を飼つていて、よくつらいことがあつたりすると犬に話したりする。「私」は一人ぐらしをしていたから余計にそういうふうになつていたのだと思ふ。(女)

自分自身に、この「私」を重ねてみると、手に取るように、「私」の気持ちがよくわかるような気がするのだ。

小さい頃、小犬や小猫をよく親に隠れて飼つていたりしたことがあつた。名前をつけ、せつせとえさを運んでかわいがつてもいなく

なる——そんな事がしばしばだった。そんな時、決まって「せつかく飼ってあげたのに」という気持ちが最初に来たはずだ。その小犬や小猫にとつての本当の幸せ」というものをついつい忘れがちだからである。特に「私」は屈託していた時にサワンと出会いサワンに愛着をもっていただけだから、その思いは大きかったにちがいない。(女)

「私」はとても繊細な人でやや利己主義な所があって寂しがりやな人だという印象をうけた。沼池に一人で住んでいるのも、世の中对して悲観的になって自分のからに閉じこもっていじをはっているのだと思う。屈託した気持ちになるのも、どうしても一人になってしまうような事情があつて、一人になりたくはないのになつてしまつて、自分でもこんな生活を望んでいるんじゃないとわかつていても変にいじをはつて、さも自分で望んで沼池に一人で住んでいるかのようにふるまつていると思う。そのつばつた気持ちでサワンとの出会いで少しやわらげたけど、また元の生活に戻ることを擦して辛いといわずにふるまつて、一人に戻つた時、また自分をごまかしている。はつきり言つて「私」と私は似ている所があるので、気持ちがわかるような気がした。「私」も私も人としてかわいくないタイプだと思う。(女)

「屋根の上のサワン」を読んですごくうれしかったですね。なぜかという、この「私」ってあたしにとつてもよく似た考え方をしているし、ちょうどあたしもペットをかつてたから。——中略——その猫を飼う気になつたのも、その猫を友達にしなくなつたのも「私」と同

じです。すつごく落ちこんでたの。原因は家族。だから、あたし、誰でも何でも良かった。あたしのそばにいてくれるものなら……。プティ(注、猫の名)がいなくなつた時もさがしませんでした。だって、絶対に帰つてくるって信じてた。「私」だつてたとえ仲間が来ても、裏切られるなんて思わなかつたでしょう。でもあれ、半分うそでしたね。どこかへいってしまうこと、わかつてたけど、それを認めたくないから、内心ひやひやしなながらもサワンを……。プティを信じようとしたんです。自分で逃がそうと思つたのも、きつとサワンが逃げるんじゃないかと、自分が逃がすんだつて思いこみたかつたんじゃないかな。(女)

だれでも、気持ちが沈む時、何かのあたたかみに触れなくなつてしまいます。この「私」、一目見ると、異質な気がしてしまいます。が、私の中の「私」だということにふつと気がつきます。サワンにとつて「私」は命の恩人でしたが、「私」にとつてもサワンは心の恩人だつたと思います。さみしい気持ちをすこしでも楽しくしてくれましたから……。そのサワンを手離したくないばかりに傷つけてしまいます。「私」のサワンは私の友達、触れ合つてくれる人なのです。私の生活に「私」がいてサワンがいて……。いろいろな事がたくさんあります。私が「私」に。友達がサワンになるような事があつたら悲しくてさみしい……。です。(女)

「私」が、「サワン、降りてこい」とか言っている部分を読んでも、思わず苦笑いをしてしまった。裏切りというのは、くやしけれど悲しい。悲しいけれどくやしい、という気持ちになるものだと

思う。(女)

「私」の気持ちは動物とふれあった事のある人には、とてもよくわかるだろうと思う。私も例外ではなく、動物を助けてやると、動物が「動物である」ということを忘れてそれがもう私そのものであり、相手の気持ちもわかっているというさっかにおちいってしまつて、一方的に悲しい思いをすることがある。だから思い届いた「私」がサワンにすくいを求めたのは、人の世界をさけて生活している「私」としては悲しいくらい当然のことだと思つた。

思い届いて傷ついたサワンのような弱い者にもすがらなくてはいけなかつた弱い「私」と、安住を望まず、習性のまま飛びたつたどこまでも野性のサワンはよい対称だと思つた。(女)

この作品中の「私」という人物は、世間から隔絶された真に孤独の状態にあり、その中でやつと見つけた星ともいえるガンに結極置き去りにされてしまい世の無情にさいなまれるのである。私は「私」ほど孤独に落ちいったことがないのでよく分からないが、がんが空にもどりたいと叫ぶのを聞くと、「私」は多分、身を刻まれるような罪悪感と、何かわけのわからない願望のようなものにかかられていたのだらう。

赤く汚れたいびつな月が昇る沼池のそばに一人で住んでいた「私」は自分の前に表われたサワンを利己的な愛情でしぼりつけながら、心のどこかで仲間といっしょに幸せな旅に出てほしいと願っていたはずだ。そして「私」自身が幸せな旅に出たかつたのだ。鳥かごの掃事をしようとかごを開いた時に、私の手元をすりぬけて逃げてい

ったインコをほうつと見ていた私も、空虚な気持ちで沼池をいなくなつたサワンをさがして歩きまわる「私」も自分が人間であることを呪いながら、飛んでいった先、無事ならいいと願っているのだ。サワンの悲鳴のような叫びは「私」の叫びが共鳴していたのだらう。(女)

③ 「私」に対する賛同・共感・同情

「私」が雁を手ばなしたくないという気持ちは私にも通じてくる。きずついた動物を一生懸命にかんびようとしてそれでなおただけでもうれしくなるのに慣つきでもすればやっぱり自分のものにしいたいと思つのは当然だと思つた。でも「私」は雁のさびしそうな鳴き声をきいて逃がしてやろうと思つただけでもすごい。(女)

毎日毎日話し相手もなく無変化する生活をする事になると思つたが、私を含めこういう生き方をできる人はそういないと思つた。(女)

新聞の記事で五月病が最近の学生に減つたとのつていたけど、この「私」は、そのての人生についてとかの答えの出ない事について悩んでいたと思つた。

僕もよくそんな事を考えたりする事があるがそんな時は何か他に集中できる事を深して、いつの間にか悩まなくなつてしまつた。「私」の周りの環境から集中できる事がすくなくところからサワンが出てきたんだと思つた。「私」は周りに人がいない所からどうしても自己中心的な性格になり、このような悩む結果になつたと思つた。

(男)

主人公の「私」はそうとう性格がゆがんでいる。だから、これまでも何回も人にだまされたり、つらいめにあったのだと思う。だから、一人で住んでいて、そのくせ自分一人だと孤独でたまらないので、サワンを見つけたとき、喜び助けたのだと思う。サワンが逃げた後、主人公は死んでいるかもしれない。(男)

「私」という人は淋しい人間だと思った。たよる人がいないから、生きがいがないから孤独になって、屈託した気持ちになつたんだと思う。——中略——「私」も孤独で淋しいからサワンを離したくなかつたのかもしれない。(女)

「私」は孤独な生活をしているので、相手の気持ちを考えることにかけているのだと思う。だからサワンを自分の好きなように自己中心的に飼つたり、サワンががんの群れに帰りがつても、にがすまいとしたんだと思う。もし「私」が集団生活をしていたら、サワンの気持ちを考へて治療してやつたらにがしてやつただろう。もし私が孤独な生活をしていたらなんでも自分の好きなようにする自己中心的な人間になると思う。人は集団生活をするることによつて他人の気持ちを考へる思いやりのある人間になることができるのだと思った。(女)

私の場合、家族もいるし、まわりにも人、動物がたくさんいて、孤独というものを感じにくくなっています。「私」は一人ぐらしのさみしい気持ちのはけ口を傷つたサワンにみつけたのだと思います。「私」にとつて、たった一人の「家族」ができたのです。サワンをまるで、自分の子供のように、恋人のように愛しくて、かわい

くてたまらなかつたのではないかと思ひます。「私」はもとの、孤独な生活を恐れていたから、異常なほど、サワンに執着したのだと思ひます。(女)

ずっと一人で暮らして、甘える人もいないし、甘えられる人もいない生活を送っていたから、ふいに現れたがんに甘えているところがあつたのかもしれない。(女)

「私」は一人ぼっちの孤独な生活で話し相手が一人もいなくて、けつして豊かでもなく、すごくさみしい思いをしていたところに、動物でも何でもいっしょにいられるということ、このがんは「私」にとつて動物以上のものだつたと思うし、ぜつたい手離したくない、一人ぼっちの生活にもどりたくないという気持ちだつたと思ひます。だから、サワンが「私」にだまつて逃げて「旅に行つてゐるんだ」と思ひたかつたのだと思ひます。(女)

何もない所で一人で暮らして、よく平氣だな—と思う。いつも思ひ屈した心でゐるのは、他の人とかかわりがなく、孤独だからだと思ひます。がん(サワン)と出会つてからは思ひ屈した心が少しづつはれていたし……。やっぱり一人でゐるよりも数人でゐる方がいいと思ひます。一人だつたら誰にも気がねなく暮らせるが、自分勝手になつていくと思ひます。自分のことも、人のことも同じように考へられるようにしなければと思ひました。(女)

この「私」は被害者意識が強すぎるのではないだろうか。近所はなし一人で住んでいて心が屈託しているというのは、人と人との関

係でなにかあり、一人で人のいない所へとじこもってしまったのではないかと思う。(女)

僕も人間なので、「私」みたいになるとむざんにガンの翼を切っているかもしれないと思った。結局、この作品のけつまつは、「私」がかなしみでいっぱいになっておわって、さいごには自分の心をまてをまかしてしまふ。僕でもこんな立場におかれるとこうごまかしてしまふだろうと思つた。(男)

怪我をしたサワンを助け、その「サワン」との関わりが自己中心的、身勝手であると解釈されたが、私は「私」がサワンが我が子のように見え、かわいかったからこそ、そんな態度になつたんだと思う。私に言わせれば、私は、この「私」のような心の持ち主でありたいと感じたのと同時に、老人のさみしさを理解し、孤独な老人を一人でも少なくしてあげたいとも思つた。(女)

④ 「私」に対する反感

この「私」はサワンを飼うことでどんなに気をまぎらわすことができたかを考えると、サワンは「私」にとって光輝く神様のようなものであつたらう。しかし、サワンにとっては迷惑だ。僕は思うに、動物は本能的に自然で力強く生きることが本当の幸せで、人間にちやほやされるのは幸せではないのではないだろうか。ガンは一生を旅しつづける。芭蕉の考えた人生観に通ずるところがあるような気がする。(男)

ガンを助けたときは気まぐれな狩猟家だとかいたずら好きな鉄砲

撃ちとその人たちのことをいっながら自分が羽を切つたりすることは、そういった人たちとほとんどかわらないから矛盾していると思ひました。それにさみしいのなら沼池なんかの近くに一人で住まなくてもいいと思ひました。「私」に対して私は自分かつてなの腹が立ちました。(女)

「私」は自己中心で自分勝手です。いつもこんなのかどうか分かりませんが、屈託した気持ちの時、私だつたら落ちこんだり、人に八つ当りしたりします。だから「私」の気持ちも分かりません。しかし、これではサワンがかわいそうです。サワンは決して「私」のおもちゃではないのだから。——私の愛着を裏切つて——とあります。が、「私」は本当に心からの愛情をもってサワンに接したのでしょか。私は「私」が勝手に決めつけているだけだと思います。(女)

あんな暗い生活をしているのは、過去にろくなことがなかったにちがいない。自分は過去にどんなことがあつても暗い生活を送ることはない。

サワンは一種の被害者だと思ふ。自分のためにむちゃくちゃにされたのだ。自分もペットを飼っているが、身勝手に扱わない。この人の性格は、ものごとを深く考えすぎだと思ふ。(男)

「私」は、生きる望みを無くしている人のような感じだった。その屈託した気持のはげ口といえは、やっぱり人間でない動物を相手に遊んでやることだと思ふ。僕でもそういう気持ちになれば身近な動物を相手に落ち込んだ気持ちを取り戻そうと思ふ。でもこ

れを読んでみて、そういう時の動物はなんだかただの道具のように思えてきた。ただ人間の心を晴らすためだけのおもちゃのような感じがする。(男)

「私」はもともと孤独なんだし、サワンがいいいめいわくだと思う。自分で孤独がいやなら自分で孤独にならないように考え方をかえてみるなり、めいわくをかけないように努力してみればいいのになと思つた。(女)

⑤ 「私」に対する要望

私は「私」を、すごく淋しい人だと思つた。そしてすごくかわいそうな人だと思う。それは、サワンに逃げられたからではなく、サワンをたよって、自分一人では何も出来ないというか、そういう「私」をかわいそうな人だと思う。もっと外にとびだすというか、自分で何かをつくつていくというか——中略——早く自分で世界を広げてほしい。(女)

動物には一時的に忘れさせることしかできない。やはり人間には人間だ。早く一生いっしょにすごせる人を見つけるべきだと思つた。

(男)

屈退した心をいつまでもサワンをかわいがることよってまぎらわしては、いけないと思う。自分からその屈退した気持ちを取り除くようにしていかなければ、いつかは自分にもどつてくると思ふ。私もだけど力い(注、強い意か)人間になつてほしいです。

(女)

サワンがかわいそうだというのも、自分のように孤独にさせたくないと言う気持ちもあるだろうけど、私は、それ以上に、サワンにうらぎられるような形にだけはしたくなかつたんじゃないかと思つた。だから、この屈託した理由は、人にうらぎられるかどうかしたんじやないかと思う。しかし、屈託したからと言つてずっと山ごもりしていたところで、——中略——この暗い気分からはぬけきれないと思つた。だから「私」もサワンのように仲間のところにもどればいと思つた。(女)

三、反省と課題

一人一人に積極的に作品に取り組ませる、というのが今回の大きな目標であつたが、完全に達成されたとは言ひ難い。その理由として、

。プリントの内容が平面的な羅列になつてしまつたこと

。うかつにも、授業者が、生徒の意見を批判するような言葉づかひや表情をしてしまつたこと

。生徒自身の活字ぎらい、読書ぎらい

等が考えられる。普段からの授業の取り組みに甘さがあつたように思つた。

また、生徒同志の意見交換の場が少なかつたこと、主人公の心情理解に重点をおいたため、情景等の描写については、その理解のための道具としての読みしかできていなかった点も悔やまれる。もっと作品全体から受ける印象、雰囲気をも大事にする必要があつたように思つた。

(広島県立三原東高等学校教諭)